

## 大会長講演 極限という経験を開く

近田真美子(福井医療大学)

### 1, はじめに

みなさま、おはようございます。本日は、臨床実践の現象学会第 6 回大会にお越しいただき誠にありがとうございました。福井医療大学で看護学科の教員をしております、近田真美子と申します。

今回は、新型コロナウイルス感染症の急増という危機的状況の中、学会にご参加いただけましたこと、心より感謝申し上げます。そして、新型コロナウイルス感染症により亡くなられた方々に謹んでお悔やみ申し上げますとともに、罹患された皆さまと、ご家族および関係者の皆さまに心よりお見舞い申し上げます。また、昼夜を問わず、医療の最前線で活躍されている皆様にも心より敬意を表したいと思います。

本会は、2009 年 2 月 1 日に臨床実践の現象学研究会として産声をあげ、2015 年より臨床実践の現象学会として、年 1 回、学術集会を開催してまいりました。前回の第 5 回大会において、「次回は北陸で開催しますのでぜひお越しください」とお伝えしたのもつかの間、瞬く間に新型コロナウイルス感染症に翻弄され、やむなく北陸での開催を断念せざるを得ない事態となりました。対面形式での開催を楽しみにして下さった皆様には、大変申し訳なく思っております。心からお詫び申し上げるとともに諸事情についてご理解いただけますと幸いです。

さて、今回の学会のテーマは「極限」としました。ここでいう「極限」とは、私たちが想像を絶するような経験という意味を含んでいます。地震や津波、原発事故のような災害や紛争、事故、病気など、私たちは、人生において様々な出来事に遭遇します。新型コロナウイルス感染症の第 5 波が押し寄せ、大都市圏を中心に自宅療養者が急増している今の私たちが置かれた状況自体も、まさに「極限」と言えるでしょう。

大ラウンドテーブル・ディスカッションでは、こうした「極限」状態にある人々とともに歩んでこられた先生方をお招きしております。お一人目は、新型コロナウイルス感染症対策アドバイザリボードを務めておられる武藤香織先生です。武藤先生には、医療社会学の立場から新型コロナウイルス感染症の倫理的・法的・社会的課題についてお話を伺います。お二人目は、稲葉剛先生です。稲葉先生には、コロナ禍で住まいを失った生活困窮者への緊急支援活動のご経験についてお話を伺います。本学会事務局からは、近田が、地域において重度の精神障がい者を 24 時間 365 日支援するスタッフの実践に伴走してきた経験についてお話いたします。

さて、ここでは、この大ラウンドテーブル・ディスカッションへのイントロダクションとして「極限」という経験を開く一つまり、極限という経験を他者と共有したり拡張していくことの可能性について、考えてみたいと思います。

### 1, 極限という経験一言で象る

そもそも、「極限」とも呼べる圧倒的な経験というのは、経験する者が限られていたり、追体験をしにくいゆえに他者と共有しにくいという特徴があります。共有しにくいのは、圧倒的な経験というのが、そのインパクトの大きさゆえに、経験した本人ですら自分が経験した出来事を言葉で説明できなかつたり、たとえ、言葉として表現できたとしても、他者へどのように伝わってしまうのか逡巡したり、受け取る側への

影響を考慮して、あえて伝えないということが起きるからだと思います。

私自身、東日本大震災を仙台市で経験したのですが、まさに、自分が遭遇した出来事を言葉にすることの難しさを実感しました<sup>1)</sup>。発災後、多くの人が一気に亡くなられたという現実や、壊滅的な打撃を受けた街の姿に衝撃を受け、自分が遭遇した出来事とは一体何なのか探り当てようと支援の合間に様々な本を必死に読み漁ったり、過去のアーカイブを参照するなどしていました。また仲間とともに、震災という出来事について遡行的に問い直す対話の場<sup>2)</sup>を拓くことで、自分の経験を適切に表現してくれる言葉を探そうとしていました。ガブリエル・マルセルは「もし人が言葉をもたなかったら、じぶんを襲っている感情が喜びなのか悲しみなのか恥ずかしさなのか、そういう区別がつかない」<sup>3)</sup>と述べていますが、まさに、自分が経験した出来事を適切に象ってくれる言葉を見つけようと必死でした。唯一、震災から1か月後という驚異的なスピードで発刊された震災関連の雑誌<sup>4)</sup>に寄せられた、被災した作家たちの慌ただしい文章を読むことで安堵している自分がいました。また、石巻市出身の辺見庸が震災後に書き上げた一連の詩<sup>5)</sup>に、自分の気持ちを代弁してもらったような思いがしました。一方、被災地から距離感のある方々の理路整然とした言葉は、気力も体力も十分あることを感じさせ、私の身体をすり抜けていきました。また、「頑張れ」とか「復興」とか「団結」といった実態からかけ離れた大きな言葉づかいにも辟易している自分がいました。言葉を欲しながら別の言葉で勝手に傷つくという悪循環に陥っていました。

言葉をめぐっては、他にも様々な出来事がありました。避難所には同じ境遇の方が多く弱音を吐けないうらやまの無い怒りを持って余っていた人。自分が経験した内容が壮絶すぎて、とても他者へ伝えられないと頑なに口を紡ぐ人たち。「自分と同じ経験をした人じゃないと話したく無い」と話す人。避難所の入り口に「こころのケアお断り」という張り紙を貼る人々もいました。こうした状況を危惧してか、震災後に被災者の方々を対象に行われた被災地での調査・研究が、人道・倫理に反するものであり被災者の精神的負担を強いるとして即刻中止するよう緊急声明文を出した学会<sup>6)</sup>もありました。福島においては、放射線についての会話が他者との関係性に影響を及ぼし亀裂を生む可能性があるため、話題にすることすら難しい時期がありました。市民と専門家とのリスクコミュニケーションの難しさ<sup>7)</sup>も浮き彫りとなりました。一方、声をかける側も、仕事や家族といった自己のアイデンティティの根幹にかかわるものを喪失した人があまりにも多く、どのように声をかけてよいのか戸惑うということがありました。言葉によって救われる一方、言葉によって傷を負ったり、知らぬ間に他者を傷つけてしまうということがありました。

そもそも、経験を言葉にのせて語るという行為には、どういう意味があるのでしょうか。現象学的な質的研究のインタビューの場面で考えてみると、問いかけることで、はっきりとは自覚できない実践の言語化を促すこと、つまり意識化を図るという側面があるでしょう。また、私が経験したように、イメージとして浮かんでいるものを言葉にして語ることで、自分の人生において生じた出来事を自分の人生に位置づけなおす「自己の再構築」という側面があるでしょう。ラファエルは、『災害の襲うとき』<sup>8)</sup>の中で、カタルフィを経験した人間はもう元と同じ人間ではあり得ないと述べていますが、まさに、こころに刻みこまれた体験を、ありのまま自らの経験として受け止める過程において、語り直す営みが必要であることを示唆していると思います。

経験を言葉に乗せて語るには、誰に向かって語るのかという宛先の問題もあります。宛先については、自己の語り直しのように自分に納得させるように語る場合もありますが、目の前の他者、またはその背後にある不特定多数の読者や社会に向けて「伝えたい」という意志をもって語られる場合もあるでしょう。この時、語られる内容は、語り手と聴き手の関係性に依って変化するでしょう。いずれにせよ、当事者が自らの経験を語るためには、受け止め手としての他者の存在が必要です。この他者は、語り手の言葉

が零れ落ちるのじつと待ち、語り直しのプロセスに寄り添う伴走者としての役割を担うとともに、固有の経験を他者と共有するための媒介者としての可能性を秘めているといえるでしょう。

## 2, 極限という経験を開く—現象学的な質的研究の意義

経験を言葉にすることは、自覚されないことに気づいたり、自己を再構築するという側面がある点を踏まえると、その語りを聴き、さらに、現象学的な質的研究という方法で研究をするという行為は、ある意味、とても、まわりくどいプロセスをたどる営みにも思えます。言葉を手掛かりに彼らの経験の意味内容を分析し、分析した結果を本人へ差し出し、また、世の中へ公開するというプロセスを経るからです。私たちは、なぜ、あえてこのような煩雑な手段を用いて研究しようとするのでしょうか。

もちろん、他者の経験を拡張するためには、研究という手法をとるまでもなく、ドキュメンタリーのように、彼らの語りを、そのまま記述するというスタイルもあります。さらには、ノーベル文学賞作家のアレクシエーヴィチ<sup>9)</sup>のように、抗いがたい出来事を経験した人々の様々な声(モノローグ)を聞き取り、物語として紡ぐ「証言文学」というスタイルもあります。自身を「耳の作家」であるとし「証言こそが文学の主人公である」と述べる彼女の作品に登場する「小さき人々」の語りは、確かに、私たちの心を大きく揺さぶります。それは、出来事に巻き込まれる中でようやく探しあてた彼らなりのオリジナルな言葉遣いに出会うからでしょう。日付や数字、被害状況のような数的データとしての事実は、歴史を俯瞰するための知識にすぎません。彼女は、人間の証言というのはいかなるドキュメントではなく生き物であると述べています。人間が出来事をどのように受け止め、どのように耐えたのか、人間と時代の関係性を示すことで「人間とは何か」という問いに向き合い続けているのだと思います。

一方、現象学的な質的研究とは、経験や実践それ自体目に見えない運動を可視化することを得意とします。個人がどのような経験をし、どう意味づけたのか、その動きを、発せられた言葉を手掛かりに可視化するのは、あえて可視化するのは、経験の意味内容を記述し伝えることが、他者の経験を拡張し触発する可能性を秘めているからだだと思います。他者と同じ経験は出来なくても、経験を拡張する可能性を孕んでいるのです。村上<sup>10)</sup>は、現象学的な質的研究により読者が心を動かされるのは、それが感動によるにせよ、嫌悪によるにせよ、具体的で個別的な事例であるからとし、これを〈触発する真理〉と表現しています。

私は、長年、重度の精神疾患を抱えた当事者の地域生活支援を24時間365日行っているACT (Assertive Community Treatment: 包括型地域生活支援プログラム)という実践に感銘を受け、彼らの実践を可視化して他者に伝えたいと、現象学的な質的研究の世界に飛び込みました。利用者の多くは、「重度」ということから精神症状が強く、本来であれば入院していても不思議ではない方ばかりです。まさに、極限のような経験をしながら地域においてしたたかに生き抜いてきた人たちです。そもそも、人間のこころや精神という事象自体、客観的データで扱える世界ではありませんが、そこに関与する専門職の実践事態も見えにくく、他の専門職から「精神科看護って、一体、何をしているかよくわからない」と言われることもありました。さらに、幻聴や妄想といった精神症状と呼ばれる体験は、追体験しにくく他者と共有しにくいという問題があります。この了解不可能性が「疾病」と「病い」を区分し、支援の質を左右する要因となります。本来であれば入院が必要な利用者の地域生活を支えるスタッフの実践は、まさに東奔西走といった様相です。彼らは、支援の必要性を認識していない当時者との関係性を構築するため多様かつユニークな実践を展開しています。こんな彼らの実践を聴き、試行錯誤しながら分析を行い、結果を語り手の本人へ返すことで、語り手自身も意識していなかった点に気づくことができた、自分の実践を改めて振り返り、自信を持つことが出来たというフィードバックをいただくことがあります。同じく

別の ACT で実践している専門職からは、「自分たちの実践を 12 色ではなく 36 色の色鉛筆で描いてくれたみたいだ」と言われたこともありました。私の研究報告<sup>11)</sup>を読んだことをきっかけに、ACT に就職した若い看護師もいました。見えにくいと称される彼らの実践を、彼らが語った内容から、頻出する単語やキーワード、言いよどみ、言い間違いなども含めた言葉の布置を確認していくことで、彼ら自身も気づかなかった実践の構造が見える形にして残すこと、これにより他者と経験を共有すること、これが、現象学的な質的研究の強みであり、極限のような固有の経験を開くことにつながるのだと信じています。

本人の言葉(語り)をあえて他者が分析する一現象学的な質的研究がこうした煩雑なプロセスたどるからには、研究としての質を担保するための作法や努力が必要になってくるでしょう。私は、経験した本人の言葉(語り)に勝るものはないため、研究する者はあくまで黒子に徹するべきだという思いがあります。分析する際も、研究者側の都合の良い独善的な解釈になっていないだろうか、心理学的な解釈をしようとしていないか、今取り組んでいる現象学的な質的研究は、一体誰のために行うのかという思いを常に巡らせています。看護職という立場上、人文学的・哲学的な思弁に埋没し臨床から遊離した徒花のような研究に陥らないよう、現象学的な質的研究を行うための作法やわきまを肝に銘じていきたいと思えます。

アレクシェーヴィチ<sup>9)</sup>は、語り手から、「こんなこと載せて欲しかったわけじゃない」と告発されたり、国家を中傷していると作品の出版が指し止めになってもなお、これらのやりとりも含めて作品として赤裸々に文字に残しています。ある意味、人間とは何かという問いへの答えとして、1 人ひとりの経験をありのまま残すという覚悟のような強い意志を感じさせます。現象学的な質的研究は、「研究」という形をとるがゆえに、ここまでの覚悟をもって論文を記述し世に出すことは難しいかもしれません。ただ、研究に向かうための思いというのは、覚悟と同じ熱量を帯びているでしょう。この後の演題発表では、発表内容や質疑応答を通して、論文の背景に潜む研究者らの様々な思いや物語も受け取っていただきたいと思っています。

### 3. おわりに—コロナ禍の今

最後に、コロナの話をしたと思います。膨大な感染者数と死者数をたたきだしながら、全世界を大混乱に陥れている新型コロナウイルス感染症。2020 年 1 月 16 日に、国内初の新型コロナウイルス感染症感染者が日本でも確認されてから 1 年半以上が経過しました。こうした事態を一体誰が予測できたのでしょうか。私たちは、この間、移動の自由の制限、飲食店の時短営業、小中高等学校の休校措置、在宅ワークの推奨、病院での面会制限、接触制限など、これまで体験したことの無い様々な出来事を経験することになりました。中でも、惜しくもウイルスにより命を落とされた方々を丁寧に葬ることさえも難しくしたという現実、新型コロナウイルスによる感染防止という大義名分があるにせよ、人生の重要な局面においてもなお優先させなければならない出来事なのか考えさせられます。私たちは、様々な局面で、これまで大事にしてきた価値観の問い直しを迫られていると言えるでしょう。さらに、この見えないウイルスの怖さは、その感染力の強さや致死性だけではなく、可視化できないという不確かさによる不安や恐怖が、様々な境界線を攪乱し、行動を通して透かし見えた他者の価値観まで尋問にかけ、他者との分断を招く事態となりました。

フィリップ・フォレスト<sup>12)</sup>は、2011 年の東日本大震災の発災直後、日本の読者へ向けて以下の言葉を残しています。

この惨事は、さまざまな哲学的、社会的意味とともに歴史の本の中で語られるべきこととなる前に、なによりもまず、いく干、いく万の人々がそれぞれに遭遇した個々の巨災の想像を絶する規模の総体であり、1人ひとりがあつという間に投げ出され、向き合わされた不条理の集積なのである。

フィリップ・フォレスト(訳／中原毅志)『天災の後』

惨事とも呼べる出来事というのは、歴史という大きな物語として語られる前に、大勢の人、1人ひとりが遭遇している出来事であることを忘れてはならない。この言葉は、現在進行形であるコロナ禍において、再び重要な意味を帯びてくるでしょう。1人の経験者として、そして、現象学的な質的研究という方法で他者の経験を開く媒介者として、今回のコロナ禍で1人ひとりが投げ出された経験に思いを馳せながら、ここに、第6回大会の開催を宣言したいと思います。

#### 文献

- 1) 震災後の支援活動の様子は、近田真美子(2011),〈こころのケア〉とは何か ケアチームでの活動を通じて考えたこと, 精神医療, 第4次, 64号, p113-121, 批評社. で言及した。
- 2) 震災という出来事を遊行的に問い直す場として、2011年5月より、てつがくカフェ@せんだいとせんだいメディアテーク(<https://www.smt.jp/>)との共催で「考えるテーブル×てつがくカフェ」を開催した。現在まで76回開催しており、現在も継続中である。
- 3) 鷲田は、震災後、講演会や著書の中で、ガブリエル・マルセルのこの言葉を引用しながら、こころの繊維としての言葉をみつけることの重要性について言及している。／鷲田清一(2012):語りきれないこと 危機と傷みの哲学, 角川oneテーマ21, 角川学芸出版。
- 4) 赤坂憲雄、伊坂幸太郎、大島幹雄、木瀬公二、熊谷達也ほか(2011):仙台学 東日本大震災, Vol11, 荒蝦夷。
- 5) 辺見庸の「死者にことばをあてがえ」など／辺見庸(2011):眼の海, 毎日新聞社. 辺見は、震災後の状況を「茫然自失」と表現し、この出来事を適切に表現する言葉を誰も持ち合わせていないことの寂しさや虚しさについて触れながら、自分にできることは、このたびの出来事を深く考え、想像し、それを〈ことば〉として打ち立てることであると述べた。
- 6) 日本精神神経学会東日本大震災被災地における調査・研究に関する緊急声明文:  
[https://www.jspn.or.jp/uploads/uploads/files/activity/2011\\_05\\_13jspnkinkyuuseimei.pdf](https://www.jspn.or.jp/uploads/uploads/files/activity/2011_05_13jspnkinkyuuseimei.pdf) (5月13日付文書)
- 7) 近田真美子(2016), 原子力災害時における専門職の役割を問う—不安の軽減と信頼の構築, 精神医療, 第4次 84号, p101-107, 批評社。
- 8) ビイバリー・ラファエル／石丸正訳(1989):災害の襲うとき—カタストロフィの精神医学, みすず書房。
- 9) スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ、鎌倉英也、徐京植、沼野京子(2021);アレクシエーヴィチとの対話「小さき人々」の声を求めて, 岩波出版。
- 10) 村上靖彦(2021):交わらないリズム 出会いとすれ違いの現象学., 青土社。
- 11) 近田真美子(2015):あつと驚くACTです「暮らしを支える」ってこういうことだったのね, 精神看護, 18(1), p2-26, 医学書院。
- 12) フィリップ・フォレスト／中原毅志訳(2011):天災の後:月間すばる6月号, p183。